「真理、統治、主体性：フーコーの真理概念に関する一試論」

報告者：清水雄大（獨協大学他　非常勤講師）

司会：重田園江（明治大学政治経済学部　教授）

**・発表要旨**

　本報告では、フーコーの「真理」概念に注目し、この哲学者の思想形成のなかで真理の概念がどのように練り上げられていったのかを論じた。晩年のフーコーは自分の哲学を、「存在があるということに驚き」に由来する存在論ではなく、「真理があるということへの驚愕」に端を発した真理論であると述べていた。それゆえ、真理という概念の検討はフーコーの思想を理解する上で欠かせないと考えられる。しかし、これまでの先行研究では、知、権力、主体といった概念が主に分析されており、それゆえ、本発表はこの空隙を埋めることを課題とした。

　本発表は以下の三つの節に分けて論じられた。

　第一節では、フーコーの「真理への意志」という概念に着目して、同時期の彼の真理概念を検討した。その際、主に「ニーチェ講義」（『＜知への意志＞講義』（1970-71年度）所収）に依拠し、真理への意志が知への意志という概念とどのような関係にあるのかに着目した。フーコーによれば、知（認識）とは個々の個体による世界の解釈（遠近法）であり、自らの遠近法を事物と他者へ押し付けることでもある。それゆえ、認識は必然的に他の認識との闘争を伴う。ところが、このような知の間での水平的な闘争に、フーコーは垂直な次元の闘争、つまり知への意志と真理への意志との闘争という次元をつけ加えている。真理への意志とは、諸々の知の闘争を真偽の分割によって秩序化し、支配しようとする。それに対して、諸々の知はこの真理への意志への押し付けにたえず反抗する。したがって、この時期のフーコーにとって、真理とは知に内在しつつも知を抑圧する力として考えられていたのであった。

　第二節では、知−権力の具体的な分析を経た後のフーコーが、「真理の政治学」（または「真理の体制」）として真理概念を再定式化したことの意義を分析した。ここで言われる真理の政治学とは、知（言説）−権力（身体の政治テクノロジー）という互いに異質な要素を分節する。では、いかにして真理は知−権力のあいだで機能するのか。彼の考えでは、真理は知-権力が共有しうる「客体」（狂人、飛行者、セクシュアリティなど）を現実として構成する。ここで報告者は、この知−権力−真理の絡み目に対して、当時のフーコーが二つの抵抗の可能性を考えていたことを指摘した。第一の可能性は、知−権力に絡めとられる前の身体＝物体（corps）へと回帰するものである。しかし、この可能性はユートピア的であるとみなされ、次第に退いていった。第二の可能性は、真理への意志に対して、「そのような仕方で統治されない意志」を対置することであった。ところが、後者は現実として構成された客体に服従化＝主体化しないということであり、なお消極的な考えであったと言える。それゆえ、申請者はこの抵抗をめぐる袋小路によって、晩年のフーコーが主体性について再考することを余儀なくされたことを示唆した。

　第三節では、晩年のフーコーの真理概念を「真理と主体性」という観点から検討した。『生者たちの統治』（1980-81年度講義）講義で、フーコーは、たえず錯覚（悪魔や悪しき霊）にとりつかれた主体性とは、古代の砂漠の修道院のなかで発明されたひとつの主体性（ないし生存の技法）ではないかという仮説を述べていた。そうであれば、虚偽に憑かれたこのキリスト教的主体を批判し、そのような主体性を形づくる司牧権力に抵抗するためには、真理（科学真理）を持ち出せば良いとはいかなくなる。というのも、このキリスト教的主体は、「真理と主体性」という歴史のなかに現れた一幕にすぎないからだ。それゆえ、この時期のフーコーにとっての抵抗の可能性とは、「真理と主体性」の複数性を歴史のうちから掘り起こし、真理と関わる主体性の複数性（と根源的な自由）を示すことであったことを確認し、申請者は本発表を終えた。

**・質疑応答の報告**

　　質疑応答の部では、本発表の議論が、佐藤嘉幸氏の『権力と抵抗−−−−フーコー・ドゥルーズ・デリダ・アルチュセール』（2008）のフーコー論（第一章、第三章）とどのような相違を有するのかが問われた。報告者は以下の回答を寄せた。

　申請者の理解する限り、『権力と抵抗』のフーコー論は次のような流れになっている。中期フーコーによるニーチェ系譜学の解釈から権力論の萌芽を取り出し、つぎに彼の権力論のアポリアを確認し、間にドゥルーズの議論（リビドー経済に向かう脱主体化としての、「他なるものへの生成変化」）を経由しつつも、最後には主体性概念の練り上げ（「自己への生成変化」）が論じられる。このような議論の組み立ては、本発表の節区分や主張と重なるところがある。

　しかし、第一の相違として、本発表は近年刊行されたコレージュ・ド・フランス講義（『＜知への意志＞講義』や『生者たちの統治』）によって明らかになった真理に関する多様な省察を導きの糸としてフーコーの議論を再構成しており、それゆえ扱ったコーパスが同書とは異なっている。ここから、中期フーコーのニーチェ解釈に関する違いが出てくる。『権力と抵抗』では、知（認識）間の水平的闘争が重視されているのに対して、本発表では知と真理との垂直的闘争を問題にしていたのであった。

　第二に、抵抗の可能性に関する議論についても、両者のあいだには違いが確認される。同書では、抵抗の第一の可能性としての「身体＝物体への回帰」と、多様な主体化による抵抗の第二の可能性は、ドゥルーズとフーコーそれぞれの抵抗の思考として等しい価値を認められていたように思われる。それとは異なり、本発表では、「身体＝物体への回帰」は明確に退けられ、晩年のフーコーの主体性論に軍配を上げている。

　第三に、晩年のフーコーの主体性概念のどこに抵抗の余地を認めるのかという問題に関して、同著と本発表の間には差異があるように思われる。『権力と抵抗』は、特異な倫理的主体化（自己への生成変化）こそが、現在の知−権力−真理に対する抵抗であると主張されているように思われる。他方、本発表は、晩年のフーコーにとっての抵抗とは、主体性が歴史的に複数存在しえたというこの歴史的事実そのものにあるとした。そして、この主体化の歴史的複数性を系譜学によって明らかにすることこそが、現在の主体化＝服従化に対する抵抗として考えられていたのではないか、という仮説を提案した。